

論文：

地域に“つながり”を促進することを目的に実施した 心理臨床ワークショップの検討 PCAグループおよびコミュニティ臨床の視点から

押江隆¹・池ヶ谷采佳²・玖村奈美³・山根倫也⁴・坂本和久³
矢野慶次郎³・南和宏⁵・白石潤一²・香川実穂²

¹山口大学 ²山口大学教育学部 ³山口大学大学院教育学研究科
⁴関西大学大学院心理学研究科 ⁵山口大学教育学部卒業生

A Study on the Workshop of Clinical Psychology which Aims to Facilitate “Tsunagari” in Area From the Perspectives of PCA Group and Community Clinical Practice

Takashi OSHIE¹・Ayaka IKEGAYA²・Nami KUMURA³・Tomonari YAMANE⁴・Kazuhisa
SAKAMOTO³・Keijiro Yano³・Kazuhiro MINAMI⁵・Junichi SHIRAISHI²・Miho KAGAWA²

¹Yamaguchi University ²Faculty of Education, Yamaguchi University ³Graduate School
of Education, Yamaguchi University ⁴Graduate School of Psychology, Kansai University
⁵Graduate of Education Faculty, Yamaguchi University

要旨

本研究では山口市にて「市民間の“つながり”」と「市民と山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センターとの“つながり”」を育むことを目的に、PCAグループ(村山, 2014)によるワークショップを実施した。質問紙調査とワークショップの自由記述による感想の分析から、これらの“つながり”が促進されたことを論じた。
キーワード: “つながり”, PCAグループ, コミュニティ臨床

I. 問題と目的

孤立化や無縁化の問題が叫ばれるようになって久しい。OECD(経済協力開発機構)は、国際的にみて我が国がもっとも「社会的孤立」の程度が高い国であると報告している(OECD, 2005)。また橋木(2011)は孤独死や年間3万人を超える自殺者、単身

世帯の急増、高齢者の貧困、未婚者の増加、少子化、離婚率の上昇、家庭内暴力や児童虐待、若者の失業率の上昇といった問題を取り上げ、血縁、地縁、社縁といった旧来の共同体が崩壊し、我が国に「無縁社会」の時代が到来していると述べている。

自殺や家庭内暴力、児童虐待といった問題がかか

わる以上、このような地域の問題は臨床心理学を学ぶ筆者らにとっても決して無縁ではない。しかし、地域住民の孤立化や無縁化を緩和するような働きかけが、はたして心理臨床の仕事といえるのだろうか。

この問いに対して下川(2012)の理論は一定の視座を与えてくれる。下川(2012)は、査定や面接といった個人臨床を「治療」、予防や危機介入、コミュニティの変革などを「臨床心理学的地域援助」と位置づけた上で、これらを「専門的援助中心の臨床」と呼んでいる。一方、人とつながり人をつないでいく仕事である「つながりの下地作り」と、つながりを使っての「人を支えるお手伝い」とをあわせて「コミュニティ臨床」、「つながりの中での臨床」と呼んでいる。下川(2012)は「コミュニティの中でつながりを広げておくことが必要」であり、「そのために心理臨床家は様々なお手伝いができる」とし、「つながりが広がってくると、そのコミュニティが本来持っている『人を支える力』が増してくるので、心理臨床家の援助を必要としない当事者に、時間のかかる心理療法などを設定しなくてもコミュニティメンバーから抱えられる場面が増えて」くと述べている。このように、コミュニティ臨床の視点からは、地域に“つながり”を育むことも心理臨床の仕事であるということができる。

ところで、筆者らが在住する山口市は「公務員の町」であるとよく言われる。宗近(2014)は「行政マンや大学等の教員など、多くの公務員系大卒者の職場がありながらも、一般の大卒者の職場が少ない」と指摘している。また、山口市の市民意識調査には「(今後山口市)変化する姿が思い描けません。公務員の町としか」、「周囲にはあまりにも公務員が多すぎて、ものの考え方や人間性が画一化しているように感じる」、「公務員と企業のサラリーマン、若い人と高齢者、交流のできる方法を考える(必要がある)」などといった市民の声が寄せられている(山口市, 2016)。では、公務員と企業のサラリーマン、若い人と高齢者といった様々な市民が、画一化することなくそれぞれの考えや持ち味を活かしながら“つながる”ために、臨床心理学を学ぶ筆者らには何ができるのだろうか。

筆者らもまた“つながり”を求める一市民である。特に、第1筆者の山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター(以下“臨床心理センター”と表記)相談指導員としての立場からは、臨床心理センターと市民との“つながり”についての問題意識がある。たとえば、山口県において不登校児童生徒数(小中計)は平成24年度で1,045人、25年度で1,098人、26年度で1,082人、27年度で1,160人、28年度で1,180人であり、また1,000人あたりの不登校児童生徒割合(小中計)は平成24年度で9.5人、25年度で10.1人、26年

度で10.1人、27年度で11.0人、28年度で11.4人と増え続けている(山口県教育庁, 2017)。一方で、不登校・ひきこもりの問題にかかわる臨床心理センターへの来談件数は平成24年で18件(木谷・田邊, 2013)、25年で12件(田邊, 2014)、26年で15件(押江, 2015)、27年で14件(大石, 2016)であり、山口県における不登校児童生徒数の増加に対応しているとは言いきれない。もちろん件数が多ければよいというわけではなく、そこで問われるのは支援の質であるのはいうまでもないが、“つながり”という視点からは、臨床心理センターと地域の支援を必要とする人々との“つながり”には大きな余地を残しているとみることもできるだろう。

では、フライヤーの配布や地域での講演等を通して臨床心理センターの広報活動がなされているにもかかわらず、市民と“つながれ”ないのはなぜだろうか。筆者らはその理由の1つとして、市民にとって心理学が親しみにくいものとして受け取られている可能性を考えた。

櫻井・有田(1994)は学生相談センターの印象について尋ねた大学生の調査から、学生相談センターから連想する言葉で最も頻度が高かったものが「暗い」であったと報告している。一方、清水・森田(2016)は、首都圏の心理学を専攻していない大学生を対象とした調査から、カウンセラーのイメージが概ね好意的なものであったと報告している。スクールカウンセラーが1995年に学校に導入され、カウンセリングに触れる機会が増えている現代社会において、大学生のカウンセリングに対するイメージは櫻井・有田(1994)の時代よりも改善していることが推察される。しかし、大学生より年齢層の高い人々にとっては、カウンセリングがまだまだ縁遠いものとして認知されている可能性を筆者らは考えた。

以上のような“つながり”の観点から眺めてみると、「市民間の“つながり」と「市民と臨床心理センターとの“つながり」の2点の課題がみえてくる。では、これらの課題に対して臨床心理学を学ぶ筆者らには何ができるだろうか。第1筆者はパーソン・センタード・アプローチ(Person-Centered Approach, 以下“PCA”と表記)やエンカウンター・グループを専門とする臨床心理士であり大学教員である。McGaw, Rice, & Rogers (1973)が北アイルランド紛争の問題で対立している人々との間に平和という“つながり”を育むことを目的にエンカウンター・グループを実施したことなども参考に、エンカウンター・グループの一種である「PCAグループ(村山, 2014)」が地域に“つながり”を育むことに寄与できるのではないかと筆者らは考えた。

PCAグループはPCAの理論をベースとして、次のような実践仮説のもと行うものである。第1に「は

じめに個人ありき」はまず個人があり、個々の人を認めることで集団が生まれると考える。第2に「所属感の尊重」であり、個人を認めると言ってもバラバラでよいわけではなく、集団への所属感を持つことが重要である。第3に「バラバラで一緒」であり、みんな同じという一体感ではなく、違いを持ちながらもそれを認めあえることを大切にする。第4に「心理的安全性の醸成」であり、強い不安は周りへの警戒を生み、持っている力が発揮しにくくなる。初期不安を減らし、安全感を作ることが重要となる。第5に「ありのままにいられる自分の強調」であり、グループ前の感想には人からどう見られるかという不安が多く、ありのままにいられるよう保証することが大切である。第6に「自発性の発揮」であり、安心感やありのままの自分を保証されると、自然と自分から動けるようになる(村山, 2014)。PCAグループではこれらの実践仮説に基づき、構成型・非構成型といった形式にとらわれることなく柔軟に技法を選択する。

PCAグループは個人の多様性を尊重し、多様な個人としてつながっていくことを考えるdiversityモデルの集団づくりを志向している(白井, 2011)。様々な市民がそれぞれの考えや持ち味を活かしながら“つながる”ことを促進する上で、PCAグループは有効と思われる。また、PCAグループでは様々なワークを体験するが、それぞれの心理学の理論的な背景について解説を加えることで、心理学のイメージが改善され、市民と臨床心理センターとの“つながり”も育まれることが予想される。

以上の問題意識から、本研究ではPCAグループによるワークショップを山口市にて開催し、「市民間の“つながり”」と「市民と臨床心理センターとの“つながり”」が育まれるかどうかについて検討を行う。

II. 予備調査

心理学に対するイメージを測定する尺度を作成する目的で、予備調査を実施した。以下にその概要を示す。

(1) 方法

a. 調査時期および手続き

本調査は201X年2月中旬に実施した。調査にはGoogleのアンケート作成サービスGoogleフォーム(<https://docs.google.com/forms>)を用いた。

b. 調査協力者

調査協力者はGoogleフォームに回答した306名(平均年齢 29.5 ± 8.9 歳)であった。そのうち女性は138名、男性は168名であった。これまでに心理学を専門的に勉強したことのある者は152名、ない者は

154名であった。また大学の一般教養科目等で心理学関連の講義を受講したことのある者は217名、ない者は89名であった。

c. 調査内容

心理学に対する印象を32の形容詞対を用いて5件法でたずねた。形容詞対には小杉ら(2014)に加え、心理学に対する信用度や身近さ(「疑わしい-信用できる」, 「疎遠な-身近な」など)に関するものなどを含めた。

(2) 結果と考察

以下の分析にはR (3.5.1)およびpsychパッケージ(1.8.10)を用いた。

心理学に対する印象をたずねた32項目に対して最尤法・promax回転による探索的因子分析を行った。その結果、MAP基準および因子の解釈可能性から、3因子構造が妥当であると判断した。そこで再度3因子を仮定して、最尤法・promax回転による因子分析を行い、十分な因子負荷量を示さない項目や複数の因子に高い負荷を示す項目を除外しながら、繰り返し因子分析を行った。その結果、3因子27項目の因子分析結果が得られた。promax回転後の最終的な因子構造、因子負荷量、共通性、因子の内的整合性および因子間相関係数を表1に示した。なお、左の形容詞が1、右の形容詞が5となるようにスコアリングした。また、各因子の内的整合性は第1因子 $\alpha = .84$ 、第2因子 $\alpha = .82$ 、第3因子 $\alpha = .75$ であった。

第1因子は「陰うつな-快活な」, 「暗い-明るい」などの13項目から構成されることから「明朗快活」因子と命名した。

第2因子は「あいまいな-明らかな」, 「空想的な-現実的な」などの11項目で構成されることから「信憑性」因子と命名した。

第3因子は「疎遠な-身近な」, 「遠い-近い」, 「非日常的な-日常的な」の3項目で構成されることから「親しみやすさ」因子と命名した。

以上3因子27項目を「心理学イメージ尺度」とした。

III. 本調査

(1) 本ワークショップの概要

a. 実施時期・会場

本ワークショップは201X年2月下旬土曜日の14時から16時に山口市のコミュニティセンターにて実施された。

b. 告知・申込方法

スーパーマーケットや市役所、図書館、美術館、博物館など、人の集まる施設に本ワークショップのフライヤーを配布した。フライヤーには本ワークショップの趣旨として「心理学といえば『固い』と

か『心を読まれそう』、『ちょっと怖い』みたいなイメージがありますが、実は日常の中にあるもっと身近なものなんです。このワークショップでは、日頃でもカンタンにできる、こころほぐしの『ツボ』をご紹介します。楽しい活動をご用意していますので、おひとりでもどうぞお気軽にご参加ください」と掲載した。

参加にあたっては事前に電子メール、ファックス、電話のいずれかで氏名・年齢・性別・職業を知らせようフライヤーに掲載した。当日の参加も可としたが、できれば事前の申し込みをするよう告知した。

c. 参加者

本ワークショップへの参加者は25名(男性7名, 女性18名)であった。年齢は10名が不明であり, 残り15名は13歳から52歳であった。なお, 25名の参加者のうち当日申込の参加者は6名であり, 年齢は尋ねていない。

なお, 参加者の数名から参加上の配慮を求める声が寄せられた。筆者らで検討した上で, 参加にあたって可能な限り困難が少なくなるよう配慮した。

事前に得られた情報等を参考に, 各参加者を8～9名程度の3グループに編成した。またファシリ

表 1. 心理学イメージ尺度の因子分析結果

	因子負荷量			共通性
	I	II	III	h^2
I. 明朗快活 ($\alpha=.84$)				
24. 陰うつな-快活な	.75	.17	-.15	.62
15. 暗い-明るい	.67	.09	-.07	.47
21. 冷たい-温かい	.66	-.16	.16	.47
25. 悲しい-嬉しい	.66	.18	.00	.53
26. 閉塞感の-開放感の	.61	.11	-.01	.42
29. 緊張した-リラックスした	.54	-.16	.12	.31
27. 苦しい-楽しい	.53	.07	.16	.38
28. 窮屈な-自由な	.53	-.05	.15	.32
8. 憂うつな-爽快な	.53	.26	-.20	.40
1. かたい-やわらかい	.47	-.22	.07	.22
30. 気持ちが悪い-気持ちがいい	.45	.24	.06	.35
22. 黒っぽい-白っぽい	.41	.12	-.05	.20
2. 四角い-丸い	.40	-.24	.09	.17
II. 信憑性 ($\alpha=.82$)				
18. あいまいな-明らかな	.03	.64	-.05	.41
20. 空想的な-現実的な	.02	.62	.23	.50
19. 非論理的な-論理的な	-.09	.61	.27	.47
16. 魔術的な-科学的な	-.14	.58	.29	.43
6. 疑わしい-信用できる	.15	.53	.11	.39
5. 不安定な-安定した	.25	.49	-.11	.36
32. バラバラな-まとまった	.11	.49	-.12	.27
7. 具体的な-抽象的な	.15	-.49	-.10	.24
11. 弱い-強い	.01	.48	-.08	.22
4. 鈍い-鋭い	.09	.43	-.08	.21
10. 理系的な-文系的な	.15	-.41	-.09	.17
III. 親しみやすさ ($\alpha=.75$)				
14. 疎遠な-身近な	.14	.01	.71	.58
13. 遠い-近い	.09	.10	.66	.51
23. 非日常的な-日常的な	.15	.17	.51	.40
因子間相関				
I. 明朗快活	-	.30	.25	
II. 信憑性		-	.19	
III. 親しみやすさ			-	

テーター（以下“fac”と表記）を第1・2・5筆者（押江・池ヶ谷・坂本）が、コ・ファシリテーター（以下“cofac”と表記）を第3・4・6・7（玖村・山根・矢野・南）が務め、各グループに参加した。

d. 本ワークショップの内容

本ワークショップではPCAグループを実施した。開始時に、第1筆者より次のように伝えた。「これからPCAグループというグループワークを実施します。PCAグループが他のグループワークと異なる点の一つは、必ずしも人と話さなくてもよいという点です。ワークに無理に取り組みなくても大丈夫です」

次に、2つのワークを実施した。第1に、PCAグループの「心理的安全性の醸成」の実践仮説から、最初に1人で行うワークを導入した。ワークには「このころの天気描画法(土江, 2008)」を用いた。このワークは「いまのあなたの気持ちを天気にたとえて絵を描いてみてください」と伝え、「このころの天気」を1枚の用紙にクレヨン等で描いてもらうというものである。描き終わったら、絵を見せても差し支えな

い場合は参加者同士で見せ合ってもらった。話したい人には自由に話をしてもらい、その様子がなければ話をさせることはしなかった。facやcofacは各自の様子を見守りながら、自らも一緒にワークに取り組んだ。

第2に、参加者同士の“つながり”を促進する目的で「みんなで100マス作文(木村・相原・村山, 2014)」を参考に、その短縮版である「80マス作文」を実施した。このワークはfacより出されたお題にあわせて1枚の用紙にみんなで1人1文字ずつ順番に文字を書いていき、最終的に80文字ちょうどの作文を完成させるワークである。文字を書く際には無言であることを求められ、お互いに相談することはできない。このときのお題は「好きな人にはじめて送る文章(ただし手紙やメールといった媒体は問わない)」とした。作文が完成したら、その文章についてグループで、たとえば「この文章は手紙かメールか、それともその他か」、「この文章を書いた人はどのような人か」、「この文章はどのような人宛に書かれたものか」、「この恋はうまくいくと思うか」、「この文章にタイトルをつけるとしたら、どんなタイト

表 2. PCAグループ的ワークショップ集団形成尺度の項目

I. 自分らしさの肯定

2. このワークショップで私は、素の自分で過ごしていると感じる
3. 私は、参加者に自分の意見などを伝えている
6. このワークショップで私は、本当の自分を出せていると感じる
8. このワークショップで私は、ありのままの自分で過ごしていると感じる
15. 私は、このワークショップにいても緊張せずになれる

II. メンバー相互のつながり

1. 私は、参加者に対して仲間意識を持っている
4. 私は、参加者同士のきずなを感じる
5. 私は、このワークショップを居心地良く感じる
10. 私は、このワークショップに対して親しみを感じる
13. 私は、このワークショップの雰囲気が好きだ

III. 個人の尊重

7. このワークショップでは、参加者一人ひとりの個性を受け入れていると感じる
9. このワークショップは、一人ひとり価値観を大切にしていると感じる
11. このワークショップでは、そのひとりらしさを認められていると感じる
12. 参加者がどのような考えを持っていても、このワークショップでは受け止めてもらえると感じる
14. このワークショップは、個性を出しあえるワークショップである

ルになると思うか」等について話し合うよう求めた。その後、どのような作文が完成したか、どのような話し合いをしたか等について、各グループから全体に向けて発表を求めた。facやcofacは各自の様子を見守りながら、自らも一緒にワークに取り組んだ。

また、心理学との“つながり”を促す目的で、各ワーク実施後にそれぞれの理論的背景について、第1筆者(押江)より解説を加えた。「こころの天気」実施後にはフォーカシングについて、また「80マス作文」実施後にはPCAグループについてそれぞれ解説した。さらにそれぞれに関する読書案内を加えた解説のレジュメと、臨床心理センター等のフライヤーを各参加者に配布した。

(2) 調査内容

a. 質問紙

本ワークショップの効果を検討するために、「PCAグループ的ワークショップ集団形成尺度」と、予備調査で作成した「心理学イメージ尺度」への回答を本ワークショップの実施前と実施後に5件法で求めた。

なお、PCAグループ的ワークショップ集団形成尺度は、山根・押江(印刷中)を参考に、「PCAグループ的学級集団形成尺度(白井, 2010)」の3因子から因子負荷量の高い5項目をそれぞれ抽出し、文言を「クラス」から「ワークショップ」に、また「クラスメート」から「参加者」に修正した上で、子どもも参加する可能性をふまえて理解しやすいように表現を若干修正したものである(表2)。第1因子は「自分らしさの肯定」であり、PCAグループの実践仮説の「ありのままにられる自分」と「自発性の発揮」に相当する。第2因子は「メンバー相互のつながり」であり、PCAグループの実践仮説の「所属感の尊重」と「心理的安全性の醸成」に相当する。第3因子は

「個人の尊重」であり、「はじめに個人ありき」と「バラバラで一緒」に相当する。

上記2尺度に加え、性別と年齢の回答を求めた。実施前・実施後いずれも無記名式で実施した。

b. 自由記述

終了後、本ワークショップの感想を自由に記述するよう求めた。自由記述については記名式で実施した。

IV. 結果

(1) 質問紙の分析

以下の分析にはR (3.5.1)およびrstanパッケージ(2.18.1)を用いた。

回答に不備のない15人(女性11人, 男性4人)の回答を対象に質問紙の分析を行った。そのうち1人の年齢は不明であり、残り14人の年齢は11歳から57歳であった。各下位尺度の項目の合計を算出し、尺度得点とした。ワークショップ実施前・実施後それぞれの2尺度の各下位尺度得点の中央値と最大値および最小値を表3および4に示した。

2尺度の各下位尺度得点について、本ワークショップ実施後の得点(*post_score*)が、実施前の得点(*pre_score*)に差分(*diff*)を加えた得点を平均とする正規分布に従う($post_score[i] \sim normal(pre_score[i] + diff, sigma)$)と仮定して、差分と標準偏差(*sigma*)についてマルコフ連鎖モンテカルロ法(Markov Chain Monte Carlo methods; MCMC)によるベイズ推定を行った。差分の事前分布は区間[-150, 150]の1様分布、標準偏差の事前分布は位置母数0、尺度母数5のコーシー分布に従うと仮定した。また、差分を標準偏差で除した値を効果量*d*とした。長さ2000のチェーンを4つ発生させ、バーイン期間を1000として得られた総サンプルサイズ4000の乱数に

表3. PCAグループ的ワークショップ集団形成尺度の各下位尺度得点

項目数	実施前(<i>pre_score</i>)			実施後(<i>post_score</i>)		
	最小値	中央値	最大値	最小値	中央値	最大値
自分らしさの肯定	5	11	22	7	17	25
メンバー相互のつながり	5	13	21	7	20	22
個人の尊重	5	15	25	15	20	25

(N = 15)

表4. 心理学イメージ尺度の下位尺度得点

項目数	実施前(<i>pre_score</i>)			実施後(<i>post_score</i>)		
	最小値	中央値	最大値	最小値	中央値	最大値
明朗快活	13	42	52	39	47	62
信憑性	11	33	39	29	37	42
親しみやすさ	3	9	13	9	12	15

(N = 15)

よって事後分布を近似した。

以下に各下位尺度得点についての推定結果を記述する。なお、いずれの下位尺度得点についても、すべてのパラメータについて $\hat{R} < 1.1$ であり、有効サンプルサイズは総サンプルサイズの10%以上であったため、マルコフ連鎖は定常分布に収束していると判断した。

a. PCAグループ的ワークショップ集団形成尺度について

PCAグループ的ワークショップ集団形成尺度の「自分らしさの肯定」得点の差分について、点推定値は4.54、95%確信区間は[1.44, 7.75]であった。また標準偏差について、点推定値は5.91、95%確信区間は[4.06, 8.84]であった。さらに効果量 d の点推定値は0.80、95%確信区間は[0.21, 1.42]であった。

「メンバー相互のつながり」得点の差分について、

点推定値は4.84、95%確信区間は[1.97, 7.69]であった。また標準偏差について、点推定値は5.42、95%確信区間は[3.79, 8.00]であった。さらに効果量 d の点推定値は0.93、95%確信区間は[0.31, 1.54]であった。

「個人の尊重」得点の差分について、点推定値は5.56、95%確信区間は[2.84, 8.22]であった。また標準偏差について、点推定値は5.13、95%確信区間は[3.56, 7.64]であった。さらに効果量 d の点推定値は1.12、95%確信区間は[0.46, 1.78]であった。

以上の3尺度について、推定されたパラメータの事後分布を表5に示した。

b. 心理学イメージ尺度について

心理学イメージ尺度の「明朗快活」得点の差分について、点推定値は4.93、95%確信区間は[0.58, 9.21]であった。また標準偏差について、点推定値は8.06、95%確信区間は[5.63, 11.84]であった。さらに効果

表5. PCAグループ的ワークショップ集団形成尺度の推定されたパラメータの事後分布

自分らしさの肯定									
	EAP	se_mean	sd	2.5%	25%	50%	75%	97.5%	
diff	4.54	0.03	1.59	1.44	3.53	4.49	5.56	7.75	
sigma	5.91	0.03	1.21	4.06	5.07	5.73	6.55	8.84	
d	0.80	0.01	0.31	0.21	0.58	0.79	1.00	1.42	
メンバー相互のつながり									
	EAP	se_mean	sd	2.5%	25%	50%	75%	97.5%	
diff	4.84	0.03	1.45	1.97	3.90	4.85	5.78	7.69	
sigma	5.42	0.03	1.11	3.79	4.64	5.28	6.01	8.00	
d	0.93	0.01	0.32	0.31	0.71	0.92	1.14	1.54	
個人の尊重									
	EAP	se_mean	sd	2.5%	25%	50%	75%	97.5%	
diff	5.56	0.03	1.35	2.84	4.71	5.59	6.40	8.22	
sigma	5.13	0.02	1.06	3.56	4.40	4.96	5.69	7.64	
d	1.12	0.01	0.33	0.46	0.90	1.13	1.35	1.78	

表6. 心理学イメージ尺度の推定されたパラメータの事後分布

明朗快活									
	EAP	se_mean	sd	2.5%	25%	50%	75%	97.5%	
diff	4.93	0.04	2.13	0.58	3.58	4.91	6.30	9.21	
sigma	8.06	0.03	1.60	5.63	6.93	7.82	8.94	11.84	
d	0.64	0.01	0.29	0.06	0.44	0.64	0.83	1.22	
信憑性									
	EAP	se_mean	sd	2.5%	25%	50%	75%	97.5%	
diff	2.24	0.02	0.69	0.86	1.80	2.23	2.67	3.59	
sigma	2.59	0.01	0.54	1.80	2.20	2.51	2.88	3.85	
d	0.90	0.01	0.32	0.28	0.68	0.90	1.12	1.51	
親しみやすさ									
	EAP	se_mean	sd	2.5%	25%	50%	75%	97.5%	
diff	1.39	0.01	0.56	0.25	1.04	1.40	1.75	2.48	
sigma	2.13	0.01	0.47	1.47	1.82	2.05	2.36	3.27	
d	0.68	0.01	0.29	0.11	0.49	0.68	0.88	1.27	

量 d の点推定値は0.64、95%確信区間は[0.06, 1.22]であった。

「信憑性」得点の差分について、点推定値は2.24、95%確信区間は[0.86, 3.59]であった。また標準偏差について、点推定値は2.59、95%確信区間は[1.80, 3.85]であった。さらに効果量 d の点推定値は0.90、95%確信区間は[0.28, 1.51]であった。

「親しみやすさ」得点の差分について、点推定値は1.39、95%確信区間は[0.25, 2.48]であった。また標準偏差について、点推定値は2.13、95%確信区間は[1.47, 3.27]であった。さらに効果量 d の点推定値は0.68、95%確信区間は[0.11, 1.27]であった。

以上の3尺度について、推定されたパラメータの事後分布を表6に示した。

(2) 自由記述

自由記述については20名から回答があった。その内容についてKJ法(川喜多, 1967)を参考に分類し、その結果を以下に記した。なお、個人情報保護の観点から、個人を特定されるおそれのある記述については適宜改変を加えて記述した。また、カテゴリー名を【】で記述した。

「80マス作文は大変楽しく、またやってみたいと思うワークだった」、「すごく楽しい時間を過ごせた」など【楽しかった】という感想が数多くみられた。

このことと関連して、「グループワークがとても苦手で、学校ではこれまで参加できなかった。今回はとても楽しく緊張もせず(したが)、心地よかった」、「ワークショップが始まって『こころの天気』を描く時はまだまだ緊張していたが、『80マス作文』をグループで作っている時はだんだん楽しくなってきた。できあがった文について話し合いをするときに自分から発言していることに驚いた」、「最初は緊張したが、意外にもグループワークで楽しめた」、「発表できる自分にびっくりした」といった【初期不安の緩和と自発性の発揮】にかかわる声があった。

また、「80文字の文章の中での1文字の影響力、展開が大きく変わると感じた。人数が多くも少なくもなく、やりやすい人数であった。人の意見を聴いて共感したり、別の意見を聴くことでいろんな考えがもてるようになって感じた」、「いろいろな方の考え、想像のふくらむ意見が、とても楽しめた」、「年代や性別、性格の違う人たちがひとつのものを協力してつくり上げ、さらに掘り下げていく過程がとても興味深く、ひらめきの得られるようなこともたくさんあって勉強になった」といった【バラバラで一緒】に関する声があった。

このように概ね肯定的な感想がみられた一方で、「人と話すのは好きだが、知らない人は苦手。緊張した。楽しかった。自分について遠慮なく表に出す

のは難しい」というように、楽しかったものの【緊張した】という感想もみられた。また、「こころの天気はどう表現したらいいのか少し難しかったが、『つぶやき』を少し意識したら描きやすくなった」という【ワークの難しさとその対処】に関する声があった。

さらに、本ワークショップの効果について様々な感想が得られた。第1に、「頭がとてもかたくなっていることに気づいた。自分にやわらかい発想力がない!!(笑)」、「こころの天気、絵に描くと、かなり心がわかったのでびっくりした。現在、心配事、ストレスがないので晴天の絵だったが、状況に応じて天気は変わると思う」、「個を活かす感覚や集団への所属は自分次第なのだと自省した」といった【自分への気づき】に関する声があった。

第2に「子どもたちに試してみようと思った」、「PCAは仕事に活かせようと思った」といった【日常での活用】に関する声があった。

第3に「自己紹介もないままはじめたワークだったが、終えたあとゆるやかなつながりや仲間意識を感じることができた。じんわりとあたたかい感じがする」、「仲良くなれるのでグループワークが好きだ」といった【参加者間の“つながり”】に関する声があった。

第4に「また機会があったらPCAについて学んでみたい」、「PCAグループの実践仮説には共感を覚える。『はじめに個人ありき』から『所属感の尊重』へとどのように接続していくのか、その点を詳しく知りたい気持ちがある」、「今後機会があればカウンセリングを受けてみたい」といった【心理学との“つながり”】にかかわる声があった。またこのことと関連して、「(エンカウンター・グループのファシリテーションを学ぶために参加し、その)予習をしていたのに、やっぱり妙な沈黙がこわくてしゃべってしまった」、「正解を探したくなる人、正解がわからないと不安になる人がいることを知れた」といった【ファシリテーションの学び】に関する声があった。

その他、「もっとやってみたいと思った」、「短い時間だったのもう少しいろいろ話を聞いてみたかった」などの【もっとやりたい】という感想や、「また機会があったら参加したい」、「このような会にまた参加できればと思う」といった【また参加したい】という声があった。

(3) その後の展開

本ワークショップ終了後、「自分の所属している組織でも『80マス作文』をやってみた。とても盛り上がり、みんなの違った一面を垣間見ることができておもしろかった」との声が電子メールにて寄せられた。また、本ワークショップをきっかけに臨床心

理センターへの来談が1件あった。

V. 考察

本研究の目的は、PCAグループによるワークショップを山口市にて開催し、「市民間の“つながり”」と「市民と臨床心理センターとの“つながり”」が育まれるかどうかについて検討を行うことであった。

(1) 市民間の“つながり”について

「PCAグループ的ワークショップ集団形成尺度」のすべての下位尺度について、効果量は点推定値でみると大きく(.80～1.12)、95%確信区間でみても小から大の効果がみられた(表4)。下位尺度のうち「自分らしさの肯定」はPCAグループの実践仮説の「ありのままにいられる自分」と「自発性の発揮」に、「メンバー相互のつながり」は「所属感の尊重」と「心理的安全性の醸成」に、「個人の尊重」は「はじめに個人ありき」と「バラバラで一緒」に相当する(白井, 2010)。PCAグループでは、所属感や安心感の感じられる雰囲気の中で参加者それぞれのあり方が尊重されると、各参加者の個性が発揮されそれぞれを認めあえるような集団が形成されていくと仮説されており、白井(2011)はこれをdiversityモデルの集団と呼んでいる。本結果は本ワークショップがdiversityモデルの集団形成に一定の貢献を果たしたことを示唆しているといえよう。

また、本ワークショップ終了後の自由記述に「自己紹介もないままはじめたワークだったが、終えたあとゆるやかなつながりや仲間意識を感じることができた。じんわりとあたたかい感じがする」といった【参加者間の“つながり”】にかかわる声が寄せられていたことから、本ワークショップは参加した市民間に“つながり”をもたらしただことが示唆される。その“つながり”方は「ゆるやか」なものであり、「ワークショップが始まって『こころの天気』を描く時はまだまだ緊張していたが、『80マス作文』をグループで作っている時はだんだん楽しくなってきた。できあがった文について話し合いをするときに自分から発言していることに驚いた」といった【初期不安の緩和と自発性の発揮】や、「年代や性別、性格の違う人たちがひとつのものを協力してつくり上げ、さらに掘り下げていく過程がとても興味深く、ひらめきの得られるようなこともたくさんあって勉強になった」といった【バラバラで一緒】からも、diversityモデルの集団が醸成されていたことが示唆される。

参加者の年齢層は事前申し込み時点で13歳から52歳であり、当日申し込みを含む質問紙調査では11歳から57歳であった。子どもから大人まで、幅広い年齢層の人々の間にdiversityモデルの“つながり”が

実現していたといえよう。

以上より、本ワークショップは、市民意識調査(山口市, 2014)で山口市民から求められていたような、様々な市民が画一化することなくそれぞれの考えや持ち味を活かしながら“つながる”場として機能していたことが示唆される。

(2) 市民と臨床心理センターとの“つながり”について

「心理学イメージ尺度」の「信憑性」について、効果量は点推定値でみると大きく(.92)、95%確信区間でみても小から大の効果がみられた([0.28, 1.51])。

「明朗快活」と「親しみやすさ」について、効果量の点推定値はどちらも中程度であった(.64, .68)。ただし、95%確信区間でみるときわめて小さい値から大きい値まで分布しており(表6)、その評価は限定的に行うべきであろう。

ではなぜ「信憑性」と「明朗快活」および「親しみやすさ」の効果が生じたのだろうか。心理学イメージ尺度は5件法で実施されたものであるから、すべて「どちらでもない(3)」に回答すると「明朗快活(13項目)」は39点、「信憑性(11項目)」は33点、「親しみやすさ(3項目)」は9点になる。参加者のワークショップ実施前の中央値は「明朗快活」が42点、「信憑性」が33点、「親しみやすさ」が9点であり、また最小値も「明朗快活」が35点、「信憑性」が28点、「親しみやすさ」が6点であった(表4)。このことから、参加者はもともと心理学に対してそれほど悪いイメージを持っていないか、むしろよいイメージを持っていることがうかがわれる。心理学に対して悪いイメージを持っている者はそもそもこのようなワークショップに参加しないであろう。そのため「明朗快活」および「親しみやすさ」については必ずしも大きな変化は生じないが、各ワーク終了後に第1筆者がその理論的背景について解説を加えたことから、「信憑性」についてはイメージが改善したと考えられる。

本ワークショップ終了後の自由記述では、【心理学との“つながり”】として「また機会があったらPCAについて学んでみたい」や「PCAグループの実践仮説には共感を覚える。『はじめに個人ありき』から『所属感の尊重』へとどのように接続していくのか、その点を詳しく知りたい気持ちがある」といった声があったことや、「子どもたちに試してみようと思った」、「PCAは仕事に活かそうと思った」といった【日常での活用】に関する声があり、後日実際に「自分の所属している組織でも『80マス作文』をやってみた」との声が寄せられたことから、本ワークショップが心理学への関心を深めるきっかけとして寄与したといえる。

また自由記述では「今後機会があればカウンセリングを受けてみたい」という【心理学との“つながり”】にかかわる声が寄せられた。その後実際に臨床心理センターへの来談が1件あったことから、本ワークショップは市民と臨床心理センターとの“つながり”に一定の貢献を果たしたといえるだろう。

以上より、本ワークショップは市民の心理学への信憑性をよりよいものへとし、心理学への関心を深めることで心理学との“つながり”を促したこと、また市民と臨床心理センターとが“つながる”きっかけを提供したことが示唆される。参加者が直接臨床心理センターを利用しなくても、このワークショップをきっかけに心理学への印象をよくした参加者が知人に利用をすすめるということもあるかもしれない。そのような点でも本ワークショップが市民と臨床心理センターとの“つながり”を促進したといえるだろう。

(3) 今後の課題

本研究では山口市にてPCAグループによるワークショップを実施し、質問紙調査と自由記述の分析から「市民間の“つながり”」と「市民と臨床心理センターとの“つながり”」が促進されたことを論じた。以下に本研究の課題を5点挙げる。

第1に、本研究で用いたPCAグループ的ワークショップ集団形成尺度は白井(2010)の15項目を抽出し、文言を修正したものであるにもかかわらず、その信頼性と妥当性が検証されていない。白井(2010)の尺度は内的整合性と安定性および並存的妥当性と臨床的妥当性が確認されており、そのうち15項目を抽出した山根・押江(印刷中)においても内的整合性と構成概念妥当性が確認されているが、これらは学級集団での適用に特化したものであり、本ワークショップのような学級以外での集団にも適用可能な尺度を今後開発する必要があるだろう。

第2に、自由記述で【緊張した】ことや【ワークの難しさとその対処】について触れていた者がいたことから、参加者の困難に対してのファシリテーションについて検討する必要があるといえる。本研究ではセッション中の参加者の様子やfacおよびcofacの動きについて検討していない。今後はファシリテーションにかかわる事例研究や、facの養成・研修が必要となるだろう。

第3に、本研究では本ワークショップが参加者間の“つながり”を促進したことを論じたが、ワークショップ終了後にその“つながり”が日常生活でも維持されているかどうかについて検討していない。今後の研究では参加者の追跡調査が必要となるだろう。

第4に、上に述べたように心理学に対して悪いイメージを持っている者は本ワークショップに参加していないことから、そもそも心理学に対して悪いイメージを持っている者と臨床心理センターとの直接の“つながり”を育むには、このようなワークショップへの参加を呼びかける方法は無力である点が挙げられる。本ワークショップの参加者が、参加しなかった知人に臨床心理センターへの参加を呼びかけるということはもちろん起こり得るだろうが、そのようなことが実際に起こるかどうかについてはやはり参加者の追跡調査が今後必要といえるだろう。

第5に、本研究は本ワークショップの実施前・実施後の調査にとどまり統制群を用意していない。地域の市民間に“つながり”を広げる方法は何もPCAグループだけではない。たとえば街コン(街ぐるみの合コンイベント)やスポーツや趣味などのサークル活動も地域に“つながり”を作る試みといえるだろう。このようなPCAグループ以外の“つながり”を促す活動と比較して、PCAグループにはどのような特徴があるかについて、今後検討する必要があるといえるだろう。

謝辞

本研究の分析にあたって谷和剛氏(山口大学大学院教育学研究科)にご助言をいただいた。ここに感謝の意を表す。

文献

- 川喜田二郎(1967). 発想法, 中公新書.
- 木村太一・相原誠・村山正治(2014). 大学初期の導入事例, 村山正治(編著). 「自分らしさ」を認めるPCAグループ入門, 創元社 pp. 69-80.
- 木谷秀勝・田邊敏明(2013). 2012年度山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター活動報告, 附属臨床心理センター紀要, 4, 83-84.
- 小杉考司・川崎徳子・恒吉徹三・小野史典・押江隆・沖林洋平(2015). 講義によって心理学に対する印象はどのように変化するのか, 山口大学教育学部研究論叢第3部, 64, 83-91.
- McGaw, W. H., Rice, C. P., & Rogers, C. R. (1973). The Steel Shutter, Center for Studies of the Person, La Jolla, California. (Film)
- 宗近孝憲(2014). 高学歴化がもたらした山口県の人口問題, 471, 2-14.
- 村山正治(2014). PCAグループの理論と実際, 村山正治(編著). 「自分らしさ」を認めるPCAグループ入門, 創元社, pp. 12-26.
- 大石英史(2016). 2015年度山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター活動報告, 附属臨床心理センター紀要, 4, 83-84.

- Organization for Economic Co-operation and Development (OECD) (2005). Society at a Glance: OECD Social Indicators 2005 Edition. (高木郁朗(監訳). 麻生裕子(訳). (2006). 図表でみる世界の社会問題: OECD社会政策指標——貧困・不平等・社会的排除の国際比較, 明石書店.)
- 押江隆(2015). 2014年度山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター活動報告, 附属臨床心理センター紀要, **5**, 35-36.
- 櫻井信也・有田モト子. (1994). SD法による学生相談センターに関するイメージの測定, 学生相談研究, **15**, 10-17.
- 清水麻莉子・森田美弥子(2016). カウンセラーに対する知識とイメージの検討——身だしなみや外見に着目して, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 心理発達科学, **63**, 119-127.
- 下川昭夫(2012). コミュニティ臨床の理論, 下川昭夫(編). コミュニティ臨床への招待——つながりの中での心理臨床, 新曜社, pp.1-91.
- 白井祐浩(2010). PCAグループ的視点から見た学級集団形成尺度の作成, 心理臨床学研究, **28**(4), 523-528.
- 白井祐浩(2011). 適応とは異なる視点の集団形成の可能性——PCAグループの実践による多様性の視点から見た集団形成, 人間性心理学研究, **29**(1), 25-35.
- 橘木俊詔(2011). 無縁社会の正体——血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか, PHP研究所.
- 田邊敏明(2014). 2013年度山口大学大学院教育学研究科附属臨床心理センター活動報告, 附属臨床心理センター紀要, **5**, 41-42.
- 土江庄司(2008). こころの天気を感じてごらん——子どもと親と先生に贈るフォーカシングと「甘え」の本, コスモス・ライブラリー.
- 山口県教育庁(2017). 平成28年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題の現状について(概要), <http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/press/201710/038827.html>
- 山口市(2016). 市民意識調査(平成27年9月実施分)結果報告, <http://www.city.yamaguchi.lg.jp/soshiki/14/4236.html>
- 山根倫也・押江隆(印刷中). 児童の教師に対する態度認知と学級集団形成および学校適応感の関連——ロジャーズの3条件態度の認知による検討, 人間性心理学研究, **35**(2).